**鎌田東二著『常世の時軸』に関する考察**

目次

一、私の一読後のレビューに関して 1頁

二、『日本人は死んだらどこへ行くのか』と『常世の時軸』の関係から 1～3頁

三、鎌田東二著『常世の時軸』思潮社,2018.考 3～10頁

四、感想および考察 10頁

五、補論、世阿弥研究会との関係 11頁

参考文献(資料)一覧 12頁

**一、私の一読後のレビューに関して**

「常世の時軸」という言葉に惹かれて本書を開くと、そこには様々な人や昆虫などこの世に存在していたあらゆるものの声や感情が収められていました。

本書の物語は「悲の岬」という章に始まって「悲の岬2」という章で終わっています。

「現実の世界」と「常世の世界」とを切り結ぶというか、時空を超えた人や昆虫の人生で本人たちにしか分からないはずの最期の瞬間・大切な瞬間が描かれています。

「人は死を迎える時にどうなるのか。」あるいは「死後に家族など自分が愛する人たちはどうなるのか。」「自分がいなくなった後にこの地上の未来や将来はどうなっていくのか。」死後にも続いていく時の流れ「時軸」は確かにそこにあるのかもしれません。

著者の言葉や詩からは、過去の著作からつながる神道ソングライターとしてのご経歴や実践者だからこそ知りうる神道ソングの重要なエッセンスもあふれています。

「常世の時軸」という視点から「人生の最期の瞬間」とその先を考える大作です。

おすすめです。

**二、『日本人は死んだらどこへ行くのか』と『常世の時軸』の関係から　　　10月5日作成**

その後、鎌田先生の『常世の時軸』の詩集を読ませて頂く中で、前著の『日本人は死んだらどこへ行くのか』との関連性に気が付きました。

先生が「詩を書く」、「詩集を出版する」という行為自体が実は物凄く大事なことであったのかもしれませんね。

今日は、再び、前著の『日本人は死んだらどこへ行くのか』の方から読書を進めていました。この本は時期で言うと2017年5月の出版ですから、『常世の時軸』の詩集が出版される前の段階での作品であったということになります。

先生は前著の中で、「中世や近代を生きた人々は死後の世界の事をどのように捉えて来たのか」「死後にはあの世や常世というような別の世界に行くということが信じられてきていた」ことを指摘されています。

それが死の問題に直面をした人や死を迎える人にとって安心となる、そのようなこころの安全装置があったということも主張されていました。

たとえば奈良の大仏などで、いわゆる死生観に関する話題です。

その中で、「あの世」と「この世」を二元論的に考えず、いまここにいることを肯定し、死んだ後もまたここに戻って来ることを望むであるとか、あの世とは「彼方」にあるものではなく、いまここにあるものであるという理解へとつながって展開をされていました。

その上で、当時の日本人たちにとっては、「常世にせよ決して交流することが出来ないものとは考えてこなかった」と論が展開されていました。

また鎌田先生は前著の中で次のようなこともご指摘になっておられました。

「すなわち、死に対峙すると、人間はどうしても時間を意識します。

死んだ後の時間、子どもや孫が生きている時間も考える。

死を意識することは、生れてから今日までの人生を振り返ることでもあります。

死は全ての人に歴史を意識させるのです。

歴史に対して意識的になると、それに続くのは「物語る」という行為です。

「物語る」行為こそが重要で、物語ることによって、一つの踏ん切り、けじめ、カタルシスを得る。物語ることは自分の人生を納得させ、自分自身を鎮める行為なのです。

「死」が「史」への認識を深めさせ、「史」を物語るべく「詩」にしていくプロセスを各自が意識していくべきなのです。

これは、まさに鎌田先生が『常世の時軸』の中で詩の世界を通して私たち読者に彼方にあるものではない常世の世界を見せて下さっていることに繋がっていたのではないのかと考えられました。さらに前著のそうした思想と『常世の時軸』との関連性も感じます。

また「我々は死者の委託を受けて生きている」という節には、次のような一節がありました。

すなわち「この世に生きるとは、「死者の思い」をどこかで受け止めることです。我々は生きているけれど、半分は死者の思いと重なっているのです。死者の思いとこの世を生きる我々の思いが重なり合い、二重構造のような形で生きていると思うのです。」

「死」は「史」であり「詩」である。

「死」の問題について考えることは、歴史を振り返る営みであって、それは「詩」になるそうです。

「死を考えるとは、同時に生の本質を考えることでもある。」

こういう風な鎌田先生が見いだされた視点、認識があって『常世の時軸』という作品は執筆をされたものであるのだと分かりました。

そういう意味で『常世の時軸』という詩の世界は、「時空を超えた霊界のフィールドワークのような作品」と言えるのかもしれません。

ここでは、鎌田先生の詩集をどう読むのかという点に特に着目をして感想をまとめてお

ります。

**三、鎌田東二著『常世の時軸』思潮社,2018.考**

以下では、『常世の時軸』を読ませて頂く中で考えたことや重要だなと考えことなどを中心にしてまとめ、関連事項を参考文献や資料を基に調査しながらまとめております。

神道における「常世」という概念は、海の彼方または海中にあるとされる理想郷である。

→『久高オデッセイ』の中で描かれていた世界の「ニライカナイ」ともつながるものがあるのではないのか。

またマレビトの来訪によって富や知識と命や長寿、不老不死がもたらされるとされる。

古神道などでは、神籬（ひもろぎ）・磐座（いわくら）などの「場の様相」の変わる山海や森林や河川や大木・巨岩の先にある現実世界と異なる世界や神域のことをいう。

↓

古神道や現代神道における世界観を前提にして『常世の時軸』を読み進めていく。

「悲の岬のエピソード」は死後の世界、常世の世界の入り口であって、現実世界では、東日本大震災の時のエピソードが根底にあるのではないのか。

モノリス(母之理主)というのは、非常に硬い固形の変成岩または火成岩から成り立つ地質が侵食によって露出したものである。

**Ⅰ　時の断片**

→常世への道案内　常世にたどり着くまでの出来事

←以下では考察を進めるうえで詩集の内容の要点と思われることをダイジェスト的にまとめています。

1、世界がこのようにあることの不思議に突然目覚めた少年とサイボーグ少女

身に着けているのは機械それも話。行方知れずの未来。

すべてがつながりながら変容している妙趣不可思議。

過去未然形未来過去形現在終身刑。

睡眠の暁から地平線の闇が溶融する天使の羽を持っていたサイボーグ少女。

往けるところまで往ってみようと手をつないで天の浮き橋から身を投げた。

身に付けているのは機会それも噺。

2、イタコ　イタコの星は今宵も切なく光る。

日が昇るまでの時の距離を忘れ果てて眠れぬ夜を過ごした。

忘れようとしても想い出せない苦しみが地下水に染みて星の雫となる。

涙だって渇き果てたのに。

記憶を距離で割って時の欠片を飲む。

死者はみな流星となって、無方の彼方へ飛び去って行った。

3、夢が崩れてゆく雲の峰から大鷲は飛来した。

世界の暁を告げる鐘は震魂のコードを食いちぎって逃げた。

どこへ往くのかエクソダス。見えるものだけを信じるのではないと誓ったはずだ。

行方を知らすベルは死者の手の中で凍えている。愛していると言ってほしかったんだ。

心からそれを待ち望んでいたのに。

誰にも知られずに去っていった魚の鱗の孤独

死の国が遠くにあると思っていた日々かこれほど遠くに感じられるとは。

4、夢に見た井戸の中の死顔はいつか知れず行方不明。

八咫烏がめざす方向は西方浄土ならぬ砂漠の地。還ることができないない民の漂流がはじまる。けれどどこだって生きていける。生きていればいいのだ。

生きてさえいれば夢が現実を超越して世界を変える。

巫女は羽衣をたなびかせつつ旅をする。

5、火入れ式　火の中で苦しみ火の神に怒る1匹の蟻。

風が吹き火は燃え続け黒煙は黙々と蒼穹を焦がすばかり。

もはや1匹の蟻の声も聴こえなくなった。

この世界には誰がいるのか何がおるのか神隠れたるモノよ。

6、水の欄干を雷鳴が砕く。朽ちた橋は割れて暗黒星雲となる。

もう誰もいなくなった。鬼も神も人も。戻っていく銀河はない。ゆるやかに宇宙は滅ぶ。

子供らの週末はいつも終末。子供らの終末はいつも週末。

7、みなし児が虹の文字を掴んで口に入れた。

とたんに流星となって飛び散った。どこまでも落ちて往こうこの重力に牽かれて。

魂は熱風となって宇宙を駆け抜けた。

夜汽車は北の果てを昇って行って裏返しの空を落下した。

さよならは言わないよ、いつも返ってくる声はまた会おうと叫んだまま消えた。

8、平謝りに謝るばかりの首の長い女が水辺に逆立ちをしていた。これが存在の愛よと女は叫んだ。吸い込まれるような声だった。大いなる存在の深みよ善も悪も生みなしたみなもと。汝を名づける何もない深淵よ。声は途切れ空は裂け星の臓腑が飛び散った。

9、帆柱をま青に押し立てて滑るように補陀落船は奔った。

蜻蛉が空を切った。鮮やかに垣間見えた観音浄土を目指し。どこまでも蒼き海原を往く。

しかし念悲観音力補陀落船はいつになっても浄土に行き着くことはなかった。

かえって奈落へと墜ちていった。そう仏説ながら補陀落浄土は存在しないのだ。

そこにあるのは腐堕落都会。彼岸はついに悲願でしかなかった。

燃えるような希望に満ちて奈落へと行きついた。

10、天空に埋めこまれた地雷を飲み込んで鯨は星間トンネルを行く。

密は鯨の父から引き抜いた剣を持って闇を切り裂く。

失われた時は喪われたわけではない。思い出すことを忘れただけ。

思い出せ思い出せ思い出せ、万像の星。想い出せ想い出せ想い出せ森羅の命。

天の川が足の裏から頭の先までさらさらと流れている。天河大辨財天。

思い出すのだ銀河の水音。

11、流星

水が火に転じるところ風が土に変じるところそんな物質の果てと境を旅する今生では。空を伝う流星は生死の行方を告げ知らせ未知なる海の響きに耳を傾ける。

誓いあった未来は星の数ほどあれど、光輝くまで進化した夢は少ない。

沈黙のうちに夜が降りて来る足音を子守歌として眠った日々。

誰もが入り込めぬ秘密の部屋で出会った記憶の数々を語り明かさぬまま旅立っ

てゆく。

12、外れた顎をはずしたまま電車に飛び乗って有楽町へ行った無数の始祖鳥は行方不明。

懐に無精卵を入れたまま入水自殺した血のつながりのない妹たちよ。

鳥シャーマンの末裔は末期の目を以って啼く。

もう生きていてもむだ死ぬしかないのよと。

鳥たちはしかし一斉にと殺処理され、破棄される。

供養も糞もない。

13、山高帽は熱砂星の目玉を喰らって逃げた。銀河燈台守りの下着が盗まれた北極の夜に失禁する愛の金鉡を抱えたまま。利子はいつになっても減ることも増えることもなく亡霊のように佇んでいた。

14、不知火の鏡の国に火を点けて餓鬼阿弥陀仏頬張っている金星少女は啼いた。

口から鯨鳥の羽を吹き出して。捥ぎ取られた翼が口腔から燃え拡がった。

行方はどこまでも不明の隧道。

明かりも希望もない洗濯挟みの夢の雫が黒髪を濡らす。

何時まで経っても業火は消えないが確かに時のまにまに哀しみと共苦の歌声は高ま

っていく。歌え歌うのだ時の証を。絶命を回避する朱鷺の声を。

15、七夕の夜稲妻の男と女がよっぴいて吹き荒れた。そのために墓に去来した大黒柱が十二本倒れて管を巻いた。再生不可能と刑事の入れ歯が哄った。

マンドリンは悲しげに森の中に分け入って運命の音に耳順う。

人知れず行方不明になっている男女は心中天の網島から観音浄土に渡ることができたという物語に耳を傾けるわけではない。

十二両編成の夜汽車が夜の墓場を疾走する。

意味を失ったものこそ最も深い意味の臥所にあって不眠不休で生を壽ぐ。

16、仄めかす物音に獅子の涙が光った。

出口なしの眼球が天空にあって睥睨した。

約束の地は枯れはてて林檎も実も成らない。

芯の中から凍てつく絶世銀河を生方不明の夜汽車が流浪する。

信じられぬ暗黒のマリアよ。

もはや還るところはない。ひたすら往くのみ。

17、存在と時間の中に振り込める夕立。

稲妻に乗って降臨した猿の未来に開いている水門。

掟という掟が崩れた後に建立される極楽浄土に道はない。

あるはずのないところにないはずの天水と賢者の石が浮かぶ星の海を旅した。

結末のない物語を語る舌は死の影に暗く染まりながら血を流す。

行く末に雷鳴が轟き超越の雷鳴とともに異界へと超虎す。

18、異形の夜明けに万華鏡が揺らぐ。

混沌の中から立ち上がる発泡スチロールの夢。

宇宙の夜明けの暗さは格別だ。

喉元まで祈りの言葉が出ているが声に出す暇もなく黄昏ていく。

19、番犬、ヒヤシンス、蜂

疾走に継ぐ失踪によりSOSは到着せず受信不可能なまま地球軌道を回転し続けた

がいつまでもどこまでも霧は晴れない。

←東日本大震災で命を落とした人たちへ向けた詩であろうか。

20、常世からの使者は青蛙とともに黄泉返る。

波間に漂う瞬間、銀河鉄道を呼び寄せ死者と交換する。

時軸の香くの木の実を白鳥が銜えて急降下する。

急ぎ抜き手を切って飛び上がり白鳥と共に群青の中に没する。

埋葬のような蒼の陶酔。

21、この世紀は人間の解体を要請していると科学者は主張し

それゆえに超人をとアナウンスした孤独な哲学者は乗り越えるべき

ジンカンに届くことなく事切れた。

22、世界創世の始まりの時軸

逃げることの出来ない存在世界多様消滅。

いつの間にか昇天しているこの世の果てにいて

蛸となって海を見ていた新しい産みの歌を。

23、見上げた空に向かって真一文字に落下していく魂。

死ぬことが生きることなのよ、生きることが死ぬことなのよ。

落下が上昇であった、あの永劫回帰する朝。

**Ⅱ　常世行**

鎌田先生が見られた常世の姿

**常世へ**

常世の入り口　夜明けが訪れる

不生不滅、不増不滅、定常宇宙。

往ける者、逝けるモノたちよ

この世にはもはや持ち運びできる塵一つない。

ただ泡のごとく浮かび、ひたすらに待ち、望む。

**月虧けて**

悲の器、入れる悲なし。

それほどに蒼き悲の果て　観音岬

**死海往生(死海に生まれる)**

**佐藤西行vs鎌田東行歌合せ**

読者としては、以下のような視点に留意をしつつ読んでいく必要があるんだろうなと思います。

視点1、西行という人について、あるいはその人となりについてどう考えるのか。

西行法師(1118-1190.2.16)は本名を佐藤義清と言い、平安時代末期の大歌人である。

彼は17歳で兵衛尉となり、御所の北側を警護する「北面の武士」であった。

北面での生活の中では歌会が催され、西行の歌はそこで高い評価を得ていた。

しかし西行は1140年に北面での生活を捨て22歳の若さで出家をし、悟りの世界に強く憧れつつ、現世への執着を捨てきれず悶々とする中で気がつくと花や月に心を寄せ歌を詠んでいたとされる。源平の動乱の混沌とした世界にいて、自分の美意識や世界観を最後まで描き出した人物である。

視点2、そのような西行法師と鎌田東行先生の歌合せをどう読むのか。

佐藤西行先生が花や月に心をよせて歌を詠まれていたということにもあるように、東行先生は神道の世界観から佐藤西行先生が詠んだ風景や思いを美しく詠まれていらっしゃると思われます。

また体言止めや字余りなどの和歌の技法も佐藤西行先生の和歌と対応させながら非常に上手く歌を詠まれていらっしゃると思います。

**めざめ**

常世の情景

1日過ぎたら戻れない。

甦るモノはない。

死者は目覚めたが、行先不明のまま漂流している。

漂流する魂の影。

寄り着く岸辺もなく　行く先も告げず　常世船は行方不明。

帰ることはない　行くこともない。

一日過ぎたら戻れない。洞窟の中で時は目覚めた。

**Ⅲ　時じくのかくの実**

「非時香菓(時軸のかくの実)」に関しては、『日本書紀』「垂仁天皇記」において田道間守が垂仁天皇90年2月1日に天皇の命を受けて常世の国に派遣されたという記述が残されている。常世の国とは、海のはるか彼方にあるとされる理想郷であり、「非時香菓(時軸のかくの実)」は若がえりや長寿・不老不死などの効能があるとされている。

**常世で出会った人たちの物語**

1、森の奥の鳥居　永遠の眠り、さようなら。

死んでいくとはこのように風に吹かれることだったのだ。

2、話したくても言葉にならなかった。涙だけが死者の言葉だったのだ。

涙だけが死者の合言葉。

3、愛と言葉　言葉とは距離と差異の追認。届かぬ思いの確認。永遠の探索。

4、暗号を解くためには秘愛が必要。愛は世界暗号を読み解き変化させる魔術。

こわれてありがとうといえるか。

壊れてしまった世界を前にして壊れてしまった自分がそれでもありがとうといえる場所に連れ出されうるか。

5、死んで帰ってくる場所もなくしてしまったのだとかなしくなった。

闇だけが包んでくれる救ってくれる。闇は全てを隠し全てを消し去る。

その闇の中でのみ僕は憩った。

6、流星　星になる魂

海からは遠く陸からも遠くこの世の果てにやってきた。もはやどこにも誰もおまえを

知るものはいない。向こうに大きな滝がある。天地を貫く龍巻のようなその滝はすべ

ての星の死骸でできている。ここまで来た者はその死骸になるのだ。天の川はこの世

の果てから向こう側に身を投げいれた孤独な魂の死骸からできている。

7、鳥首峠　永遠に明けることのない夜が始まった。

8、森を徘徊する1匹の妖怪　夜は長かった。永遠に明けなかったから。

9、オートバイは菜の花畑で死んだ。オートバイはゆっくりと海を渡っていった。

どうしようもなく懐かしい調で目覚めた。優しさの橋に虹が架かった。

2つのオートバイが45度に啼き合いながら虹の橋をわたっていって涙の島となって

天と海をつないだ。

10、老人と高下駄をはいた童子　真実を写す鏡を配りに行く。

人一人死んでも誰も泣かなかった。誰も迎えに行こうとしなかったのだ。

真実は誰にも見えなかったから。

11、北に向かう身体　死ぬのではない滅びるのでもない待っているのだ。

いつそれがきてもいいように。

いつかやってくることを待ち望んでいる。死ぬのではない滅びるのでもない待っているのだ。

12、神鏡を池に埋めに行った神女

どのようにして魂を供養すれば良いのか誰も教えてくれなかった。

往方不明の神女たちが鳥首峠の断崖に祭壇を設けて海に祈った。

祈りを聞き届けたという合図でもあるかのように海の底から天に向かって雷神が駆け上がった。

空に突き立てた孤独な指を鳥が垂直に切り落として奈落に運んでいった。

待人来たらず。確かに　は来なかったのだ。

どこにも救いはなく、時軸のかくの実もないのだAルチアよ。

**悲の岬2**

「音信不通の音源を逆探知したが事切れてしまった悲劇的な予言者」

←現実世界とは異なる常世の世界の音源を複数の詩として記述してきた。

←「始祖鳥」命の循環や転生の暗示か。

**四、感想および考察 10月21日(日)作成**

① 9月の世阿弥研究会の際にご案内を頂き、鎌田先生の第一詩集である『常世の時軸』を読ませて頂きました。まず、自分なりにどのように鎌田先生の第一詩集を読んでいくことが出来るのか考えて感想と考えを整理してみました。

② 読書を進めていく中で鎌田先生の前著の『日本人は死んだらどこへ行くのか』で提示されておられました視点や主張との関係について非常に重要な関係性があると考えました。

③ 具体的には、「死に対峙すると、人間はどうしても時間を意識します。死んだ後の時間、子どもや孫が生きている時間も考える。」ということや「死は全ての人に歴史を意識させるのです。」ということや「「死」が「史」への認識を深めさせ、「史」を物語るべく「詩」にしていくプロセスを各自が意識していくべきなのです。」ということなどでした。

④ こうした繋がりの中から『常世の時軸』を読んでいくと、常世信仰との関係や『古事記』や『日本書紀』に出て来る田道間守が垂仁天皇の命を受けて常世の国に探しに行ったという不老不死や長寿をもたらす「時軸のかくの実」との関係が見えて参りました。

⑤ 田道間守が常世の国から戻った時には既に垂仁天皇は崩御されておられたのでしたが、『常世の時軸』の中での「時軸のかくの実」の結末は同じかまたは類似する結末として考えることができるのだろうかなど考えました。

⑥ また垂仁天皇や田道間守が活躍していた時代から繋がる時の流れの中で、人々は常に死の問題に直面をしてきたし、死生観も様々である中で不老不死や理想郷を求め続けて来て現在まで至っているんだなということも分かったように思います。

**五、補論、世阿弥研究会との関係 10月22日(月)作成**

① 以上の事を鎌田先生と河村先生が以前に世阿弥研究会の中でおっしゃっておられた第一詩集の『常世の時軸』を読んで新作能を作って欲しいという話題に繋げますと次のようなことが言えるのかなと思います。

② すなわち、『世阿弥能楽論集』「能作書」では「種」「作」「書」という能作に関する技法の章がありましたが、河村博重先生が鎌田先生の第一詩集『常世の時軸』を種として新作能を作り書にしていかれるというプロセスがこの後に続いていくのかなと思われました。

③ またその時には、能というのは人々の悲しみ(悲嘆)と向き合ってそれを演能することを通じて浄化させるカウンセリング的なものであるという河村博重先生のお話を前提とすれば、現代の人々が直面している悲しみや悲嘆ということやあるいは中世から近代を生きた人々も直面してきた悲しみや悲嘆とが繋がって浄化をされていく可能性が出て来るんだなと思われました。

④ その中で今回、鎌田先生が第一詩集の『常世の時軸』の中で描かれた世界に救いようがあるのかという課題がどう変化していくのかということに繋がって、暗い暗い世界、どうしようもない救いようのない世界がどう演能され変化をしていくのかということになるのではないのかとも思われました。

⑤ ところで、今回の読書や調査の全体を通しましては、神仙思想の中でも触れられておりましたが「海の向こうにはニライカナイ(理想郷)があると言われている。」という思想と共通するものがあったように思われました。そこで、常世に関するそうした理解がどういう風に現代的に展開をされてきているのかということなどにも注目をしておりました。

以上が、私からの感想等を含めた鎌田先生の第一詩集『常世の時軸』に関する報告になります。

**参考文献(資料)一覧**

① 鎌田東二著『常世の時軸』思潮社,2018.

② 鎌田東二著『日本人は死んだらどこへ行くのか』(PHP新書 ; 1095),PHP研究所, 2017.

③ 坂本太郎,平野邦雄監修『日本古代氏族人名辞典　普及版』吉川弘文館,2010.

「垂仁天皇」pp.365～366、「田道間守」pp.412～413.

④ 荻原浅男,鴻巣隼雄校注・訳『古事記　上代歌謡　日本古典文学全集』1992.

「中巻　垂仁天皇[五]時じくの香りの木の実」pp.207～208.

⑤ 宇治谷孟著『日本書紀(上)　全現代語訳―全二巻―』(講談社学術文庫),講談社,1995.

巻第六　垂仁天皇　活目入彦五十狭芽天皇pp.134～151.

「田道間守」pp.150～151.

⑥ 「田道間守」

https://ja.wikipedia.org/wiki/田道間守　閲覧日時、2018年10月21日(日).

⑦ 「常世の国」https://ja.wikipedia.org/wiki/常世の国　閲覧日時、2018年10月21日(日).

⑧ 「西行」https://ja.wikipedia.org/wiki/西行　閲覧日時、2018年10月21日(日).

⑨ 「佐藤義清(後の西行)の出家」

http://www.intweb.co.jp/saigyou/syukke3.html　閲覧日時、2018年10月21日(日).

⑩ 平野邦夫,瀬野精一郎編集『日本古代中世人名辞典』吉川弘文館,2006.

「西行」pp.406～407、「垂仁天皇」p.528、「田道間守」p.617.

⑪ 松村明編『大辞林　第三版』三省堂,2006,「神仙思想」p.1296.

⑫ 「西行法師の生涯」http://kajipon.sakura.ne.jp/kt/haka-topic23.html

閲覧日時、2018年10月21日(日).

⑬ 「神仙思想(しんせんしそう)とは - コトバンク」

https://kotobank.jp/word/神仙思想-82098　閲覧日時2018年10月22日(月).

⑭ 村上重良著『日本宗教事典』講談社,2000.

「古代の宗教　陰陽道　民衆道教と流行神」pp.48～49.